ンビーナーで分りまして、カナダの在来石油の埋蔵量はわれわれが考えていたよりも増えそうです。

さて、武山さんが指摘された諸問題について、私の考えを申し上げますと、カナダには去年よりは今年、今年よりは来年が良くなるという期待感がある、ところが世界的不景気の中でそういう期待感を維持するのは難しいことだ、というのはおっしゃる通りだと思います。カナダのように、完全に貿易収入に依存している国にとっては特にそうです。わが国の国民総生産（GNP）に占める貿易依存率は、実に二五パーセントにのぼります。ですから、世界的に不況になり、カナダの主要な輸出相手国がその影響を受けますと、わが国としてはお手上げになるわけです。昨年の輸出はかなり順調にいったようですが……。日本と似て、カナダ経済の最も健全な部分は輸出だと言えるかもしれません。今年はどうなるか、あまり楽観はできませんが。

政治的不安定についてですが、これはわが国の特異な連邦制によるものです。ご承知のように、カナダの国土はあまりに巨大で、中央集権化した政府によってこれだけの国を治めるのは無理です。一八六七年の憲法によって、州は一定の権限が与えられました。州はこうした権限を固守しています。カナダでは、こうした状況をどういう風に変えるべきか、現在、連邦政府と州政府の間で広く討議されています。特にケベックの現状について、何らかの変更が加えられるでしょう。わが国の憲法（英国領北アメリカ条例）の〝カナダ化〟をどう進めるか、それをどういう風に修正していくかについて、大幅な検討がなされています。

武山さんはケベックにも行かれましたね。

武山　残念ながら行ったのが週末で、レベック首相にも誰にもお会いする機会がありませんでした。私の個人的感じとしては、ケベックが分離するのは、ケベックにとっても、カナダ全体にとっても経済的に大きな損害です。ケベックが連邦にとどまるよう、何とか折り合って欲しいですね。

大使　私はそうなると思います。ケベック党が選ばれたからケベックの分離は間違いないと考えるのは、当ってないと思います。分離はないでしょう。

武山　ケベック州から企業が州外に転出しているようですね。

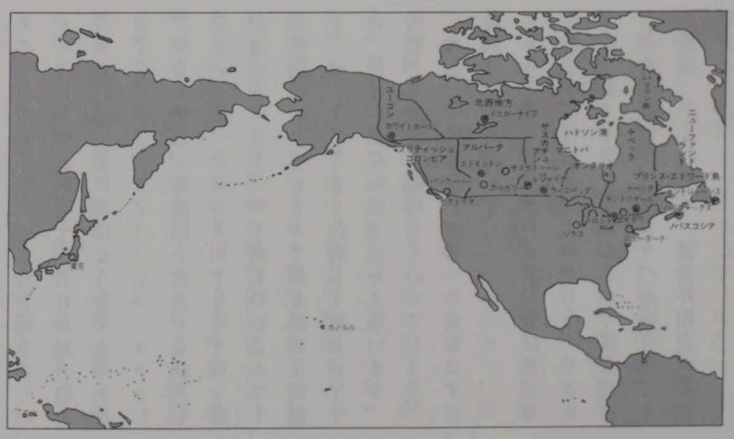
労使関係に改善の兆し

大使　そういう動きは、ケベック州の経済を弱め、州住民の不満を一層高めるだけですよ。

ところで、先ほどの話に戻りますが、アルバータ州の石炭について、連邦政府の政策のせいで石炭政策の策定が二年も遅れた、炭鉱経営者の皆さんがそういう苦情を呈していたとのことですね。これは実はアルバータ州政府の政策でして、連邦政府の政策ではないんです。アルバータは石油および天然ガス資源が非常に豊富で、州政府には石炭を急いで開発しようという気はありません。むしろ、天然ガスや石油が少なくなったときに備えて、石炭はそのまま地下に残しておきたいということでしょう。州政府の政策で、高いロイヤルティー（鉱区使用料）――トン当り最高八ドルというスライド制の税金――を課しているのは、そのためです。大半の石炭はそれよりかなり低いロイヤルティーが課されるわけですが、それにしてもお隣りのブリティッシュ・コロンビア州のトン当り一ドル五〇セントとは相当の差があります。アルバータ州とは違って、ブリティッシュ・コロンビア州には石油も天然ガスもそれほどありませんし、アルバータ政府のような石炭の開発抑制は考えていないわけです。いずれにしても、アルバータ州の石炭開発問題は同州政府の石炭政策によるもので、連邦政府の政策によるものではありません。

カナダの過去との繋がりについて申し上げますと、確かに植民地時代の名残りはみんなもっているかもしれませんが、それほど強調するようなものでもないと私は思います。カナダの現在の諸問題はカナダ自身が作り出した問題です。カナダが英国の指導あるいは支配から抜けだしたのは、ずっと前のことで、当時のことを覚えている世代はもうおりません。現在の英国との繋がりは、政治的というよりはむしろ兄弟関係のようなものです。

政府と経済界の仲が悪いというのは、おっしゃる通りでしょう。私自身も、カナダへ帰ってこの冷たい関係を直接見聞しました。ただ、それは変わりつつあります。政府は経済に対するいわゆる〝介入〟を避ける傾向にあります。ただ、過去二、三年、カナダを旅行して――特に七六年九月に東岸から西岸まで横断して――得た経験からしますと、経済人というのはどんなことでも決して自らを責めることはない、と言えると思います。生涯のうちで一度でも間違いを犯したことのある経済人に会ったことはありません。



不運というものは、誰か他人によってもたらされるという考え方です。カナダの経済人というのは、ある一定の状況に対して、ほとんどいつもそういう風に反応するわけです。一九五〇年代頃には、政府と経済界とは非常にうまくいっていたのですが、どうもそれがだんだんと崩れていったようで……。しかし、政府、経済界とも、現在は、よりを戻そうと一生懸命に努力しているようです。武山さんがご指摘のように、わが国はいろいろな面で転換期にあると思いますが、これはそのひとつでしょう。中でも特に私が常に最大の関心を寄せているのは、カナダの労使関係です。私はこの問題について非常に心を痛めており、そろそろ新しい労使関係のあり方を誰かが見つけてしかるべきだと思うのですが……。労使関係